

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	どう読むSilas Lapham -- A Modern Instanceとの比較の中で
Title(English)	
著者(和文)	上西 哲雄
Authors(English)	UENISHI Tetsuo
出典(和文)	第87回大会Proceedings (日本英文学会) , , ,
Citation(English)	The 87th General Meetings of the English Literary Society of Japan, , ,
発行日 / Pub. date	2015, 9

どう読む *Silas Lapham* *A Modern Instance* との比較の中で

上西 哲雄

[第一セッション]

1984年に刊行された *A Modern Instance* のペンギン版の序文を Edwin Cady は、この作品が発表された 1880 年代初めがハウエルズにとって人生の節目の時期であったという記述から始めている。それまでにハウエルズは *Atlantic Monthly* の編集長として批評家としての地位を確立する一方、トウェインやジェームズといった高名な作家達との付き合いが深まり、小説も上梓し始めていた。それが 1881 年にアトランティック誌の編集長の職を辞して創作に専念しようとしたのがこの時期だというわけである。

まさに編集長の職を辞する年、Howells は新作 *A Modern Instance* について出版社に次のように書いている。

It is hard for me to present anything more than the motive of my work in this case; but I can say that just as the question of spiritualism was the moving principle in The Undiscovered County [Howells' novel published in 1880], so the question of divorce will be that of The New Medea [the novel to be A Modern Instance].

(Letter from Howells to James R. Osgood [his publisher], February 18, 1881)

この手紙では New Media と呼ばれるこの作品において、moving principle (物語を「推進する原理」) は離婚だと言っている。妻子を捨てた夫に復讐する妻を扱ったギリシャ悲劇エウリピデスの『王女メディア』を見て感銘を得る一方、当時としては珍しい離婚裁判のニュースに触れたことによるとされている。新しい時代の風俗を描くことを旨としたハウエルズにとっては格好の材料だった。

粗筋は次のようなものである。物語に重なる部分のある *The Rise of Silas Lapham* によると、舞台は 1870 年代の半ばのメイン州の小さな村、貧しく苦学して大学を出た地元新聞の編集者 Bartley Hubbard と、村の有力者である法律家の娘 Marcia Gaylord が婚約するところから物語は始まる。ところが女性問題から Hubbard が同僚を殴り倒してしまい、いったんは Marcia が婚約を解消するものの彼を諦めきれず、父親 Squire Gaylord の反対にも関わらず、駆け落ちするように 2 人だけで結婚して 2 人でボストンに出奔してしまう。ボストンでは紆余曲折があるものの Hubbard は新聞の編集者兼記者の職を得て何とか落ち着き、子どもも出来て順調に新婚生活がスタートしたかのようなだったが、Marcia の嫉妬深さと Hubbard の売るためには手段を選ばない仕事ぶりにトラブルが絶えず、ちょっとした気持のすれ違いと偶然から Hubbard は行方をくらましてしまう。数年経って、突然 Hubbard がインディアナ州で離婚訴訟を起こし、Gaylord 親子は異議申し立てのために出廷する。結局裁判の途中で被告代理人となった Squire Gaylord が倒れ裁判はそのまま終了する。Marcia と Squire Gaylord 親子は故郷の Equity 村に戻り、父親はほどなく亡くなり、Marcia はひきこもりがちな生活を送ることになる。Hubbard はアリゾナ州でジャーナリストとしてそこそこやっていたのだが、取材相手の怒りを買って射殺されてしまう。物語はこの 2 人の離婚と破滅の顛末に、Hubbard の大学時代からの友人で Marcia に想いを寄せる弁護士 Ben Halleck、さらにその友人でやはり弁護士の Atherton とその妻 Clara Kingsbury がからみ、また 2 人の夫婦の関係についてコメントをしながら、展開する形となっている。

このように、確かに物語の流れはカップルの結婚と破綻が軸となっていて、離婚がテーマの物語と言って差し支えない。19 世紀後半のアメリカ社会における結婚の問題は、当時の様々な社会の変化を考えると重要なテーマで、この作品は格好のテキストとして今後さらに様々に議論の対象にできるだろう。

[第二セッション]

ここでは *A Modern Instance* を *The Rise of Silas Lapham* (以下 *Lapham*) と関連づけることによって出てくるテキストの側面に注目して整理し、今度はそこから逆に *Lapham* を読み直して再評価を試みる。特に、*Lapham* はつまらないハッピー・エンディングなのか、ということについて検討する。いろいろところで紹介される小説サイラス・ラパムの粗筋は、主人公である新興成金のサイラス・ラパムが済的には破綻するものの、倫理的には上昇したとするものである。これにラパムの娘に恋をした名家の息子が、ラパム家が経済破綻をした後もぶれることなくその娘と結婚することになっていて、当時横行し始めていたとされる拝金主義的な価値観に負けないという意味ではラパムの行為と一貫していて、結末に強いメッセージを感じるの、自然なことである。

ただ、このように要約して紹介されてしまうと、出版当時の評価はともかく、少なくとも私には陳腐な倫理主義的なハッピー・エンドとしか思えず、手にとって読む気にはちょっとなれない。そこで、物語 *Lapham* を少し丁寧に読み、この物語が発しているメッセージは本当に陳腐な倫理主義なのかを検証してみる。その際に、物語サイラス・ラパムと同じく、1880年代に迎える小説家ハウエルズの全盛期の皮切りとなったとされる *A Modern Instance* と比較することで、その姿を浮き彫りにする。

物語 *Lapham* においてサイラスの成功は、物語の開始時点でそのピークを迎える。冒頭に設定された成功者としてインタビューを受けるエピソードは、インタビューを受けること自体が、成功の象徴だ。そのインタビューに答える中でサイラスは自らの過去を振り返り、その回想の中で、成功はモラルの低下によってもたらされたことが示唆される。サイラスの成功は、もともとは父親が自分の農場にペンキの材料の鉱脈を見つけたことに端を発するものの、これを事業の成功に導いたのは他人による出資が大きく寄与したこと、事業が軌道に乗るとその出資者追い出して経営を独占したことが、回想で判明する。モラルを捨てて成功をとったわけである。一方、物語の結末の破産は、その友人にはめられた異に、他人に迷惑をかけないために敢えてはまることによるものであり、成功を捨ててモラルをとった形になっている。成功とモラルの反比例するパターンが、物語の構造となっている。

一方モダン・インスタンスは、前半で紹介したように若い結婚したてのカップルが、離婚訴訟にまで至る経緯が、物語の主たる筋立てということになっているが、加えて、主人公バートリー・ハバードの仕事がそれと並行してどのようなようになっていくかということも、物語展開の推進力となっている。そこで、バートリー・ハバードの仕事の物語を追うことで、仕事の成功とモラルの関係がどのようなものとして描かれているかを見してみる。バートリーのジャーナリストとしての働きぶりは、そもそも売れるためなら何でもするというもので、モラルという点では相当に問題がある。こうした仕事ぶりに業界仲間からそのジャーナリストとしてのモラルを疑われ最後にはオーナーにも疑われて、常勤の仕事を失ってしまう。結末は特定の個人を、それも家庭内のことを材料に皮肉な冗談で冷笑する記事を書き、射殺されてしまったことが伝えられる。逆にモラルの低下が、仕事の破滅どころか人生の破滅をもたらした形になっていて、*Lapham* とは逆に、仕事とモラルは正比例するパターンである。

ただし、彼のモラルに問題があるのは、仕事だけではないように描かれている。大学からの推薦状では彼の能力は高く評価されるもののモラルの面についてはひとことも言及されず、同じく彼の能力は高く評価する周囲の人間も最初から一貫して彼のモラルを疑い続ける。実際にも生活のための借金を株式の投機や選挙結果の賭けに使ってしまうなど、仕事という範囲を越えて、彼のモラルに問題のあることは否定できない。このように、モラルの問題を仕事を越えた範囲にまで広げると、話は複雑になる。主人公の若いカップルが離婚訴訟にまで発展したのはマーシアの嫉妬とバー

トリーの短気が原因であるようになっているが、破滅への大きな結節点においては、「Demon が動いた」あるいは「Devil が彼の中に入った」という表現で、むしろ原因をブラック・ボックスに入れてしまう。結末の射殺は新聞報道の形で伝え、真相は闇の中であるような構造になっている。このように、*Q Modern Instance*においてハウエルズは、仕事とモラルの問題を、大きな枠組では、モラルを捨てれば仕事も破滅するかのようにしつつも、具体的な個人におけるそのメカニズムの詳細は良く分からないし、ましてやコントロールすることは不可能としているように思われる。仕事のモラルが何か重要な問題を孕んでいることは示唆されつつも、物語全体としては、仕事に限らず具体的な個々の人間のライフ（生）の営み表出する、それぞれが抱える闇のようなものに作者の関心が行っているように見受けられる。

このように仕事におけるモラルの役割が曖昧な *A Modern Instance* に比べてモラルの重要性が際立つ *Lapham* において、このモラルの実体とは何か。*Lapham* の物語冒頭でのインタビューの場面で、サイラスが『旧約聖書』と『ブア・リチャーズ・アルマナック』で育ったとし、19 世紀の労働倫理を代表するピューリタン主義的なキリスト教がサイラスの価値観のバックボーンにあることを示唆している。ところが物語の結末は、モラルを取り戻したサイラスが、再びビジネスの世界で正しいモラルに基づいて奮闘努力しアメリカ資本主義の経済での成功への道を邁進するようにはなっていない。奮闘努力で大金持ちになれるという成功神話は、一度しか見ることのできない、やり直しの利かないアメリカン・ドリームなのだろうか。カーネギーやロックフェラーが大富豪として登場するのは 1870 年代、*A Modern Instance* や *Lapham* の舞台である 1870 年代半ばと重なる。一方、時を同じくして移民が加速をつけながら流入、工場労働者の急増を支える。これ以降、階級・階層の激しい分化が進む一方、サイラスのようなモラルが、つまり、誰でもそれによって成功するという価値観が、工業資本主義に広がりと共に急速に広まって行く。こうした状況の中で、正直に奮闘努力すれば成功するという価値観を「取り戻した」、にもかかわらず成功のレースからの脱落を自覚する主人公の物語は、ハッピー・エンドと言えるのか。

A Modern Instance においては人間個人の内面あるいは個々の人間の関係について、*Lapham* においては個人の内面に形成されるモラルの機能を追及するという違いがあるものの、共通するのは同時代の状況に対して一般的に言われるような楽観的ではなかったということだろう。

参考文献

Edwin Cady. Introduction to *A Modern Instance*. (Penguin Books, 1984)